



政と官

関西学院大学法学部・大学院法学研究科 教授 金崎 健太郎

幾度となく社会的な問題となってきた政治家と公務員との関係。最近流行した「忖度」という言葉は記憶に新しいが、1990年代から断続的に進められてきた行政改革や国家公務員制度改革が一定の進捗を見た現在においてもなお、そのあるべき姿が模索され続けている。選挙で選ばれる政治家と試験によって採用される公務員との関係には大きく分けて二つの側面がある。一つは憲法が想定する立法府（議会）と行政府（内閣）との関係であり、もう一つは行政府の内部における政治家と公務員との関係である。前者が国家の統治システムに関わる課題であるのに対して、後者は行政府における組織のガバナンスに関する課題であると言える。政と官のあり方について考察するとき、密接に関係するこの二つの課題を混同することなく捉えていく必要がある。

最初に紹介する『議院内閣制—変貌する英国モデル』（中公新書）（高安健将／著、中央公論新社、972円）は、日本の政治改革にも大



『議院内閣制—変貌する英国モデル』高安健将／著
中央公論新社

きな影響を与えてきた英国における議院内閣制の変容と改革への取り組みの現状について考察した本である。英国の議会主導の議院内閣制は、日本が理想とみなしてきた二大政党制と政権交代を特徴とする。しかし様々な要因によって今や政党自体が国民の信頼を喪失しており、二大政党制も空洞化しているという。

EU離脱をめぐる国民投票とその後の混乱は現在も進行中であるが、著者が「国家の空洞化」という英国の現状とそれに対して進められている議院内閣制を変貌させる構造改革への取り組みは、自民党一強の現在の日本の議院内閣制の未来にも大いに示唆を与えるものであり、統治システムのあり方を考える上で学べきことが多い。

次に紹介する『官僚たちの冬—霞が関復活の処方箋』（小学館新書）（田中秀明／著、小学館、864円）は、森友学園への国有地売却や加計学園の獣医学部新設に関する問題などの不祥事によって公務員（官僚）への信頼が低下しているなか、なぜそのような状況になってしまったのかという視点から原因を分析し、改善のための方策を提言した本である。平成の30年間に



『官僚たちの冬—霞が関復活の処方箋』田中秀明／著
小学館

わたって断続的に実施されてきた「政治主導」実現のための改革をつぶさに辿りながら、その光と影を明らかにしている。官僚組織が、かつての強い自負心のもと国家のあるべき姿を考えて仕事をする「国土型官僚」から、政治家に言われたことをこなすだけの「下請け型官僚」に変容したとの指摘とともに、政治主導のもとにおいてもデータに基づく分析と検証を行った上での政策形成が必要であり、そのためには公務員を非政治化して高度の専門性を維持すべきとの指摘は説得力がある。